

九 交通・商業

I 運輸

三四二 江戸回船荷物送り状

○町内中川辺

矢嶋弓男氏所蔵

〔解説〕 宝暦五年（一七五五）に川辺村から、江戸大嶋氏家臣に送った荷物の明細である。桑名港経由となっている。

〔表書〕

廻船御荷物之事

一 御膳米

拾俵

但四斗式升入

九 交通・商業

此拾俵貫目百六拾六貫目

一 春麦

壹俵

但式斗入

此掛目八貫五百目

一 川辺上茶五拾貫目

五箇

但拾貫目入

此掛目五拾九貫目

一 御家中寄荷

壹箇

此掛目拾壹貫五百目

一 茶式箇 山本権左衛門殿え大嶋三郎右衛門より下ス

此掛目拾六貫四百目

一 茶壹箇 箕田源左衛門殿え右同人より下ス

此掛目四貫五百目

一 茶壹箇 伍藤佐太右衛門方え長兵衛より下ス

此掛目六貫目

一 茶壹箇 羽渕治部左衛門方え吉田金左衛門より下ス

此掛目八貫式百目

一 茶壹箇 渡部寛右衛門方え右同人より下ス

此掛目四貫七百目

一 茶壹箇 吉田第七方え右同人より下ス

此掛目貳貫目

ノ式拾四箇

右之通今度勢州桑名矢田甚右衛門方え向廻舟申候、着岸之刻御改御請取可被成候以上

宝暦五年乙亥年七月四日

摂州三罷在不能印形

菅野七郎左衛門

大嶋三郎右衛門^印

山本権左衛門殿

助川善兵衛殿

箕田源左衛門殿

後藤理左衛門殿

〔裏書〕

表書の御荷物無相違着船受取申候、依如件

八月十四日

山本権左衛門^印

三四三 難破舟拾得物届

○町内福島

福島区所蔵

〔解説〕 天明六年（一七八六）の渡舟難破による拾得物届書である。下吉田村の渡し舟が、当村に漂着したさいのものである。

乍恐御達申上候御事

一舟釘百五拾三本

一かすかい四丁

一かなぐり壺つ

一舟板われわれ不残

右は下吉田村渡り舟、当村ニてひろいと申ニ付、御役所様より村方吟味仕様ニ被仰付、吟味仕候処前件不残出し申候、依之御達申上候以上

天明六年七月

錦織

地方御役所様

福島村庄屋

与平次印

同 村組頭

半 十印

三四四 薪船積運送願

○町内下麻生

臨川寺所藏

(解説) 文化三年(一八〇六)に、薪積出しを従来通り

船で行うよう許可を求めたものである。それについて、積出し薪は陣屋へ届ける。薪以外は船に乗せない。陣屋の役人による検査料として、船一隻について相当の上納金を納めるとある。

乍恐奉願上候御事

当村控林並其外山内より伐出申候薪、先年より当湊大牧にて船積ニ仕来申候処、近年御不締り之由御仰聞、御指留相成申候付、町組迄岡持ニ仕候付、持出手間各々相懸り難儀仕候、何卒御勘考之上、先年之通大牧船積被仰付、被成下置候様奉願上候

一先達て多々羅十郎右衛門様え御願申上候処、御締方之儀、当村御役所附四屋表え申出、御メリ方相極御役所え、御願申上候様被仰聞候、已来左之通相心得、

(そまつ)
少も龜抹仕間敷候御事

一右薪船積之節、四屋表え願出見分改相済候上、船ニ積置四屋表其船ニ乗、大野御番所下え乗宿、御番所え四屋表御届有之、御番所御見分御改受、積下可申候間、願之通御聞済成下置候様奉願上候

一薪之外諸木並諸色一切船積仕申間敷候、たとへ薪ニても他村より仕出候薪ハ、一切船積仕申間敷候御事
一先年より大牧近辺並川上ニて、薪買候者ハ無之御座候得共、大牧より船積御免被成下候得ハ相紛候付、急度外村薪相求売払申間敷候御事

一右四屋表改見分を受之儀、臨時之儀ニ御座候間、船老艘ニ付錢四拾八文ツツ、大野御番所え差上、四屋表え直御番所より御渡被成下候へハ、乍恐御メリ方行届可申奉存候、困窮之百姓之儀ニ御座候得は、御年貢さしかへニ仕月々渡世仕、冬春薪之外ニ^(かせぎ)持も無御座候間、此段被為聞召分、願之通被仰付被成下置候ハハ、御願を以渡世可仕旨奉存候筈、御慈悲之上被仰付、被成下置候ハハ、重々難有仕合可奉存候以上

文化三年寅十一月

下麻生村組頭

与三次郎

作十郎

平右衛門

新助

宇兵衛

平八

庄屋
佐右衛門

小山七郎兵衛様

御陣屋

三四五 江戸回送荷物請取書

○町内中川辺

矢嶋弓男氏所蔵

(封書)

江戸御廻物請取書入

請取申御廻物之事

一御膳米

拾五俵

但シ四斗式升入

銘々貫目札付也

一御用御茶

六箇

但シ皆掛ケ拾式貫匁宛

一御用御搗麦

壺箇

但シ式斗三升七合入

此貫拾貫匁

一御家中御茶

八箇

但シ皆掛ケ四貫目也

一御家中御寄荷

壺箇

但シ三貫壺百目也

右は大嶋伊勢守様御用御廻物、
座候以上
慥ニ請取申候処実正御

文化十一年戌六月

佐藤源左衛門印

矢嶋六左衛門様

矢嶋仁左衛門様

(解説) 文化十一年(一八一四)の江戸へ送った荷物の

請取状である。江戸在住の加治田大嶋氏あての荷物で、川
辺村から送付している。

三四六 江戸回送米請取書

○町内中川辺

矢嶋弓男氏所蔵

(解説) 文化十一年(一八一四)の江戸回米荷物の請取状である。江戸在住の加治田大嶋氏あての荷物で、川辺村から送付している。

(封書)

江戸御廻米請取書入

請取申御廻米事

一御用糯米 拾八俵 但し四斗式升入

一御膳米 拾五俵 但し四斗式升入

一御用小豆 壹俵 但し四斗入

一御薙包 五箇

一御家中糯米 八俵

都合四拾七品也

右は大嶋伊勢守様江戸御廻物、慥ニ請取申候処実正御

九 交通・商業

座候以上

文化十一年戌十月廿九日

佐藤源左衛門印

矢嶋六左衛門様

矢嶋仁左衛門様

三四七 江戸回船荷物目録

○川辺町所蔵
(西村家文書)

(解説) 文政十三年(一八三〇)三月から二月までの、

江戸に送付した荷物目録である。川辺大嶋氏から江戸屋敷あてで、米を中心としたものであり、桑名経由で送っている。

(表紙)

文政十三年

江戸廻船米下目録並川並手形控

寅三月

七四七

第二部 文書の部

七四八

江戸廻船御荷物之事

閏三月分
一米貳拾俵

但四斗四升入

拾八貫目 七俵

此貫目壹俵ニ付

拾七貫九百目 貳俵
拾七貫八百目 貳俵
拾七貫七百日 九俵

右之通船壹艘積入、今般勢州桑名佐藤孫右衛門方え向

致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上

寅三月廿三日出船

大嶋貢印

三沢良太夫殿

野田對助殿

箕田源藏殿

江戸廻船御荷物之事

閏三月分
一米貳拾俵

但四斗四升入

拾八貫目 七俵

拾七貫九百目 貳俵

此貫目壹俵ニ付

拾七貫八百目 三俵
拾七貫七百日 壹俵

拾七貫六百目 七俵

右之通船壹艘積入、今般勢州桑名佐藤孫右衛門方え向
致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上

寅三月廿三日出船

大嶋貢印

三沢良太夫殿

野田對助殿

箕田源藏殿

差下シ申船荷物之事

一米四拾俵

右之通今般勢州桑名迄川合源三郎・藤助船ニ積下申
候、川筋御番所無相違御通可被下候以上

寅三月廿三日

大嶋兵庫内

矢嶋甚兵衛印

矢嶋仁右衛門印

川並

御番所衆中

江戸廻船御荷物之事

四月分
一米貳拾俵

但四斗四升入

此貫目壹俵二付

一桧幟杭

此貫目壹本二付

右之通船壹艘積入、今般勢州桑名佐藤孫右衛門方之向致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上
寅閏三月十六日出船

三沢良太夫殿
野田對助殿
箕田源藏殿

江戸廻船御荷物之事

九 交通・商業

拾八貫目 貳俵

拾七貫九百目 六俵

拾七貫八百目 三俵

拾七貫七百日 五俵

拾七貫六百日 四俵

五本

六貫五百目

七貫目

五貫目

五貫五百目

五貫五百目

四月分
一米貳拾俵

此貫目壹俵二付

一幟竹

此貫目貳本二付

右之通船壹艘積入、今般勢州桑名佐藤孫右衛門方之向致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上
寅閏三月十六日出船

三沢良太夫殿
野田對助殿
箕田源藏殿

但四斗四升入

拾八貫目 壹俵

拾七貫九百目 七俵

拾七貫八百目 七俵

拾七貫七百日 貳俵

拾七貫六百日 三俵

八本

拾八貫目

拾九貫五百目

貳拾貫目

拾八貫目

大嶋貢印

七四九

差下申船荷物之事

寅四月四日出船

一米四拾俵

大嶋貢印

一幟竹八本

三沢良太夫殿

一桧杭五本

野田對助殿

右之通船壹艘積入、今般勢州桑名迄川合源三郎・藤助船ニ積下申

箕田源藏殿

候、川筋御番所無相違御通可被下候以上

寅閏三月十六日

江戸廻船御荷物之事

大嶋兵庫内

矢嶋仁右衛門印

川並

御番所衆中

矢嶋甚兵衛印

五月分
一米式拾俵

但白米四斗入

此貫目壹俵ニ付

拾六貫目 拾七俵

拾六貫三百目 三俵

一筵包

壹箇

江戸廻船御荷物之事

箕浦儀兵衛行

五月分
一米式拾俵

但白米四斗入

此貫目 六貫式百目

拾五貫八百目 壹俵

右之通船壹艘積入、今般勢州桑名佐藤孫右衛門方之向

拾五貫九百目 壹俵

致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上

此貫目壹俵ニ付

拾六貫目 拾六俵

寅四月四日出船

拾六貫式百目 壹俵

大嶋貢印

拾六貫三百目 壹俵

三沢良太夫殿

右之通船壹艘積入、今般勢州桑名佐藤孫右衛門方之向

野田對助殿

致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上

箕田源藏殿

差下申船荷物之事

一米四拾俵

一衣類壹箇

右之通今般勢州桑名迄川合村源三郎・藤助船積下申候、川並御番所無相違御通可被下候以上

寅四月四日

大嶋兵庫内

矢嶋仁右衛門印

矢嶋甚兵衛印

川並

御番所衆中

江戸廻船御荷物之事

六月分

一米貳拾俵

但四斗四升入

拾六貫七百目 三俵

此貫目壹俵二付

拾六貫八百目

拾六俵

拾六貫九百目 壹俵

右之通船壹艘積入、今般勢州桑名佐藤孫右衛門方之向致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上

寅五月廿九日出船

大嶋貢印

三沢良太夫殿

九 交通・商業

野田對助殿

箕田源藏殿

江戸廻船御荷物之事

六月分

一米貳拾俵

但四斗四升入

拾六貫七百目 貳俵

此貫目壹俵二付

拾六貫八百目

拾四俵

拾六貫九百目 四俵

右之通船壹艘積入、今般勢州桑名佐藤孫右衛門方之向致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上

寅五月廿九日出船

大嶋貢印

三沢良太夫殿

野田對助殿

箕田源藏殿

差下申船荷物之事

一米四拾俵

右之通今般勢州桑名迄川合村源三郎・藤助船三積下申候、川筋御番所無相違御通可被下候以上

七五一

寅五月廿九日出船

大嶋兵庫内

矢嶋甚兵衛印

矢嶋仁右衛門印

川並
御番所衆中

江戸廻船御荷物之事

七月分
一米貳拾俵

但四斗四升入

拾七貫百目 貳俵

拾七貫貳百目 貳俵

拾七貫五百目 四俵

拾七貫七百目 七俵

拾七貫八百目 壹俵

拾八貫目 壹俵

拾八貫百目 壹俵

拾八貫貳百目 貳俵

此貫目壹俵ニ付

右之通船壹艘積入、今般勢州桑名佐藤孫右衛門方え向

致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上

寅六月五日出船

大嶋貢印

三沢良太夫殿

野田對助殿
箕田源藏殿

江戸廻船御荷物之事

七月分
一米貳拾俵

但四斗四升入

拾七貫三百目 壹俵

拾七貫四百目 貳俵

拾七貫五百目 三俵

拾七貫六百目 五俵

拾七貫七百目 三俵

拾七貫八百目 五俵

拾八貫目 壹俵

此貫目壹俵ニ付

右之通船壹艘積入、今般勢州桑名佐藤孫右衛門方え向

致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上

寅六月五日出船

大嶋貢御印

三沢良太夫殿

野田對助殿

箕田源藏殿

差下申船荷物之事

一米四拾俵

右之通今般勢州桑名迄川合村源三郎・藤助船三積下申候、川筋御番所無相違御通可被下候以上

寅六月五日出船

大嶋兵庫内

矢嶋仁右衛門印

矢嶋甚兵衛印

川並

御番所衆中

江戸廻船御荷物之事

八月分
一米貳拾俵

但四斗貳升入

拾六貫三百目 壹俵

拾六貫四百目 七俵

此貫目壹俵二付 拾六貫五百目 五俵

拾六貫八百目 壹俵

拾七貫目 六俵

一蕙包 廣瀬清左衛行

壹箇

此貫目八貫三百目

右之通船壹艘今般、勢州桑名佐藤孫右衛門方之向致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上

寅六月十七日出船

大嶋貢御印

後藤唯之丞殿

三沢良太夫殿

野田對助殿

箕田源藏殿

江戸廻船御荷物之事

八月分
一米貳拾俵

但四斗貳升入

拾六貫三百目 六俵

拾六貫四百目 六俵

此貫目壹俵二付 拾六貫五百目 六俵

拾六貫六百目 壹俵

拾六貫九百目 壹俵

一土

貳俵

貳拾四貫目 壹俵

貳拾壹貫目 壹俵

此貫目壹俵二付

右之通船壹艘積入、今般勢州桑名佐藤孫右衛門方之向致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上
寅六月十七日出船

大嶋貢御印

後藤唯之丞殿
三沢良太夫殿
野田對助殿
箕田源藏殿

此貫目壹俵三付

拾七貫四百目 四俵
拾七貫五百目 五俵
拾七貫六百目 六俵
拾七貫七百目 貳俵
拾七貫八百目 壹俵

差下申船荷物之事

一米四拾俵
一衣類壹箇
一土 貳俵

右之通船壹艘ニ積入、今般勢州桑名佐藤孫右衛門方え
向致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上
寅九月四日出船

大嶋貢御印

右之通今般勢州桑名迄川合村源三郎・藤助船ニ積下申
候、川筋御番所無相違御通可被下候以上

寅六月十七日出船

大嶋兵庫内

矢嶋仁右衛門印
矢嶋甚兵衛印

川並
御番所衆中

九月分
一米貳拾俵
江戸廻船御荷物之事

但四斗四升入

九月分
一米貳拾俵
江戸廻船御荷物之事

但四斗四升入
拾七貫三百目 貳俵

此貫目壹俵三付

拾七貫三百目 壹俵
拾七貫四百目 四俵
拾七貫五百目 三俵
拾七貫六百目 五俵

拾七貫七百目 老俵

拾七貫八百目 六俵

一蕈包

三箇

六貫三百目 老箇

五貫五百目 老箇

此貫目老箇二付

老貫七百目 老箇

後藤唯之丞殿行

右之通船老艘二積入、今般勢州桑名佐藤孫右衛門方え

向致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上

寅九月四日出船

大嶋貢御印

後藤唯之丞殿

三沢良太夫殿

野田對助殿

箕田源藏殿

差下申船荷物之事

一米四拾俵

一蕈包三箇

右之通今般勢州桑名迄川合村源三郎・藤助船二積下申

九 交通・商業

候、川筋御番所無相違御通可被下候以上

寅九月四日出船

大嶋兵庫内

矢嶋仁右衛門印

矢嶋甚兵衛印

川並

御番所衆中

江戸廻船御荷物之事

十月分
一米貳拾俵

但四斗貳升八合入

拾六貫六百目 六俵

拾六貫七百目 六俵

拾六貫八百目 五俵

拾六貫九百目 三俵

此貫目老俵二付

右之通船老艘二積入、今般勢州桑名佐藤孫右衛門方え

向致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上

寅九月廿七日出船

大嶋貢御印

後藤唯之丞殿

三沢良太夫殿

野田對助殿

箕田源藏殿

七五五

江戸廻船御荷物之事

十月分
一米貳拾俵

但四斗貳升八合入

拾六貫五百目 壹俵

拾六貫六百目 四俵

此貫目壹俵ニ付

拾六貫七百目 七俵

拾六貫八百目 六俵

拾六貫九百目 貳俵

右之通船壹艘積入、今般勢州桑名佐藤孫右衛門方え向致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上

寅九月廿七日出船

大嶋貢御印

後藤唯之丞殿

三沢良太夫殿

野田對助殿

箕田源藏殿

差下申船荷物之事

一米四拾俵

右之通今般勢州桑名迄川合村源三郎・藤助船ニ積下申候、川筋御番所無相違御通可被下候以上

寅九月廿七日出船

大嶋兵庫内

矢嶋甚兵衛印

矢嶋仁右衛門印

川並

御番所衆中

江戸廻船御荷物之事

十一月分
一米貳拾俵

但四斗貳升入

拾六貫五百目 拾三俵

拾六貫六百目 三俵

拾六貫七百目 貳俵

拾六貫八百目 貳俵

此貫目壹俵ニ付

右之通船壹艘積入、今般勢州桑名佐藤孫右衛門方え向致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上

寅十一月朔日出船

大嶋貢御印

後藤唯之丞殿

三沢良太夫殿

野田對助殿

箕田源藏殿

江戸廻船御荷物之事

十二月分

一米貳拾俵

但四斗貳升入

拾六貫四百目 貳俵

拾六貫五百目 七俵

拾六貫六百目 九俵

拾六貫七百目 貳俵

此貫目壹俵ニ付

右之通船壹艘積入、今般勢州桑名佐藤孫右衛門方へ向致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上

寅十一月朔日出船

大嶋貢御印

後藤唯之丞殿

三沢良太夫殿

野田對助殿

箕田源藏殿

差下申船荷物之事

一米四拾俵

右之通今般勢州桑名迄川合武右衛門・藤助船ニ積下申

候、川筋御番所無相違御通可被下候以上

寅十一月朔日

九 交通・商業

大嶋兵庫内

矢嶋仁右衛門

矢嶋甚兵衛

川並

御番所衆中

三四八 江戸回船運賃帳

○川辺町所蔵
(西村家文書)

(解説) 文政一三年(一八三〇)三月から一〇月までの、

江戸回船運賃帳である。内容は、川辺から桑名までの船二隻分のもので、各月別に元金・利息が記述してあることから、一二月に一括支払ったものと思われる。

(表紙)

文政十三年

運賃入用諸訳勘定帳

寅十二月

閏三月十六日分
一錢四貫八百文

川邊より桑名迄四拾俵運

此銀四拾壹匁七分四厘

質、式艘分船人え相渡ス

利銀四匁壹分七厘

閏三月より十月迄八ヶ月

閏三月廿三分
一錢四貫八百文

同相渡ス

此銀四拾壹匁七分四厘

閏三月より十月迄八ヶ月

利銀四匁壹分七厘

同相渡ス

四月四分
一錢四貫四百文

同相渡ス

此銀三拾八匁貳分八厘

四月より十月迄七ヶ月

五月廿九分
利銀三匁三分五厘

同相渡ス

一錢四貫四百文

同相渡ス

此銀三拾八匁貳分八厘

五月より十月迄六ヶ月

六月五分
利銀貳匁八分七厘

同相渡ス

一錢四貫四百文

同相渡ス

此銀三拾八匁貳分八厘

六月より十月迄五ヶ月

六月十七分
利銀貳匁三分九厘

同相渡ス

一錢四貫四百文

同相渡ス

此銀三拾八匁貳分八厘

六月より十月迄五ヶ月

九月四分
利銀貳匁三分九厘

同相渡ス

一錢四貫四百文

同相渡ス

此銀三拾八匁貳分八厘

九月より十月迄五ヶ月

利銀九分六厘

九月より十月迄貳ヶ月

九月廿七分
一錢四貫四百文

同相渡ス

此銀三拾八匁貳分八厘

九月より十月迄貳ヶ月

利銀九分六厘

九月より十月迄貳ヶ月

元利共銀三百三拾九匁四分貳厘

此金五両貳分ト九匁四分貳厘

右之通御座候以上

三四九 江戸回船荷物目録

○町内中川辺

矢嶋弓男氏所蔵

(解説) 文政一四年(一八三二)正月から二月までの、江戸に送付した荷物目録である。川辺大嶋氏から江戸屋敷あてで、米を中心としたものであり、桑名経由で送っている。なお文政一四年は天保二年のことである。

〔表紙〕

文政十四年

江戸廻船米積目録川並手形控

卯 正月

矢嶋仁右衛門控

江戸廻船御荷物之事

正月分
一米貳拾俵

但四斗貳升入

拾六貫五百目 五俵

此貫目壹俵ニ付

拾六貫六百目 貳俵

拾六貫七目 七俵

拾六貫八百目 六俵

右之通船壹艘積入、今般勢州桑名佐藤孫右衛門方之向致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上

寅十二月三日出船

大嶋貢印

後藤唯之丞殿

三沢良太夫殿

野田對助殿

箕田源藏殿

九 交通・商業

江戸廻船御荷物之事

正月分
一米貳拾俵

但四斗貳升入

拾六貫五百目 貳俵

拾六貫六百目 貳俵

拾六貫七目 拾三俵

拾六貫八百目 三俵

此貫目壹俵ニ付

右之通船壹艘積入、今般勢州桑名佐藤孫右衛門方之向致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上

寅十二月三日出船

大嶋貢印

後藤唯之丞殿

三沢良太夫殿

野田對助殿

箕田源藏殿

差下申船荷物之事

一米四拾俵

右之通今般勢州桑名迄、川合村源三郎船・栃井村庄八船ニ積下申候、川筋御番所無相違御通可被下候以上

寅十二月三日

七五九

第二部 文書の部

七六〇

大嶋兵庫内

矢嶋仁右衛門

矢嶋甚兵衛

川並

御番所衆中

江戸廻船御荷物之事

二月分
一米式拾俵

但シ四斗式升入

拾六貫五百目 貳俵

拾六貫六百目 壹俵

拾六貫七百日 拾俵

拾六貫八百目 七俵

此貫目壹俵ニ付

右之通船壹艘積入、今般勢州桑名佐藤孫右衛門方え向

致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上

卯正月十三日出船

大嶋友之丞

後藤唯之丞殿

三沢良太夫殿

野田對助殿

箕田源藏殿

江戸廻船御荷物之事

三月分
一米式拾俵

但シ四斗式升入

拾六貫六百目 三俵

拾六貫七百日 拾貳俵

拾六貫八百目 五俵

此貫目壹俵ニ付

右之通船壹艘積入、今般勢州桑名佐藤孫右衛門方え向
致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上

卯正月十三日出船

大嶋友之丞

後藤唯之丞殿

三沢良太夫殿

野田對助殿

箕田源藏殿

江戸廻船御荷物之事

三月分
一米式拾俵

但シ四斗式升入

拾六貫五百目 壹俵

拾六貫六百目 六俵

拾六貫七百日 拾壹俵

拾六貫八百目 貳俵

此貫目壹俵ニ付

右之通船壹艘積入、今般勢州桑名佐藤孫右衛門方え向致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上

卯正月十三日出船

大嶋友之丞

後藤唯之丞殿

三沢良太夫殿

野田對助殿

箕田源藏殿

江戸廻船御荷物之事

三月分
一米貳拾俵

但四斗貳升入

拾六貫五百目 貳 俵

拾六貫六百目 壹 俵

拾六貫七百目 拾貳 俵

拾六貫八百目 五 俵

此貫目壹俵二付

右之通船壹艘積入、今般勢州桑名佐藤孫右衛門方え向致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上

卯正月十三日出船

大嶋友之丞

後藤唯之丞殿

九 交通・商業

三沢良太夫殿

野田對助殿

箕田源藏殿

差下申船荷物之事

一米四拾俵

右之通今般勢州桑名迄、川合村武右衛門船・龜吉船積下申候、川筋御番所無相違御通可被下候以上

卯正月十三日

大嶋兵庫内

矢嶋甚兵衛

川並

御番所衆中

矢嶋仁右衛門

差下申船荷物之事

一米四拾俵

右之通今般勢州桑名迄、小山村善六船・栃井村庄八船積申候、川筋御番所無相違御通可被下候以上

卯正月十三日

大嶋兵庫内

矢嶋甚兵衛

矢嶋仁右衛門

七六一

川並
御番所衆中

此貫目壹俵ニ付

拾六貫七百日 拾壹俵

拾六貫八百目 壹俵

江戸廻船御荷物之事

右之通船壹艘積入、今般勢州桑名佐藤孫右衛門方え向致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上

四月分
一米貳拾俵

但四斗貳升入

三月廿四日

拾六貫六百目 八俵

大嶋友之丞印

此貫目壹俵ニ付

拾六貫七百日 七俵

後藤唯之丞殿

拾六貫八百目 五俵

三沢良太夫殿

右之通船壹艘積入、今般勢州桑名佐藤孫右衛門方え向致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上

野田對助殿

箕田源藏殿

三月廿四日

大嶋友之丞印

差下申船荷物之事

後藤唯之丞殿

五月分
一米貳拾俵

三沢良太夫殿

右之通今般勢州桑名迄、川合村源三郎船積下申候、川

野田對助殿

筋御番所無相違御通可被下候以上

箕田源藏殿

卯三月廿四日出船

大嶋兵庫内

矢嶋仁右衛門印

矢嶋甚兵衛印

江戸廻船御荷物之事

四月分
一米貳拾俵

但四斗貳升入

拾六貫六百目 八俵

川並
御番所衆中

差下申船荷物之事

一米式拾俵

右之通今般勢州桑名迄、栃井村庄八船積下申候、川筋御番所無相違御通可被下候以上

卯三月廿六日出船

大嶋兵庫内

矢嶋仁右衛門印

矢嶋甚兵衛印

川並

御番所衆中

江戸廻船御荷物之事

五月分

一米式拾俵

但シ四斗式升入

拾六貫六百目 壹俵

拾六貫七百目 五俵

拾六貫八百目 拾三俵

拾六貫九百目 壹俵

右之通船壹艘積入、今般勢州桑名佐藤孫右衛門方え向致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上

四月十日

大嶋友之丞印

後藤唯之丞殿

九 交通・商業

三沢良太夫殿

野田對助殿

箕田源藏殿

江戸廻船御荷物之事

五月分

一米式拾俵

但四斗式升入

此貫目壹俵ニ付

拾六貫七百目 三俵

拾六貫八百目 拾七俵

右之通船壹艘積入、今般勢州桑名佐藤孫右衛門方え向致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上

四月十日

大嶋友之丞印

後藤唯之丞殿

三沢良太夫殿

野田對助殿

箕田源藏殿

江戸廻船御荷物之事

六月分

一米式拾俵

但シ四斗式升入

拾六貫七百目 三俵

此貫目壹俵ニ付 拾六貫八百目 九俵

拾六貫九百目 八俵

右之通船壹艘積入、今般勢州桑名佐藤孫右衛門方え向致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上

卯四月十日

大嶋友之丞印

後藤唯之丞殿

三沢良太夫殿

野田對助殿

箕田源藏殿

箕田源藏殿

野田對助殿

三沢良太夫殿

後藤唯之丞殿

江戸廻船御荷物之事

六月分
一米八俵

但四斗貳升入

拾六貫七百目 壹俵

此貫目壹俵ニ付

拾六貫八百目 六俵

拾六貫九百目 壹俵

一米拾貳俵

但四斗四升入

拾七貫七百目 三俵

此貫目壹俵ニ付

拾七貫八百目 五俵

拾七貫九百目 壹俵

一米四拾俵

差下申船荷物之事

右之通今般勢州桑名迄、川合村亀吉・栃井村庄八船ニ積下申候、川筋御番所無相違御通可被下候以上

卯四月十日

大嶋兵庫内

矢嶋仁右衛門印

矢嶋甚兵衛印

川並

御番所衆中

差下申船荷物之事

大嶋友之丞印

一米四拾俵

右之通今般勢州桑名迄、川合村源三郎・柳藏船積下申候、川筋御番所無相違御通可被下候以上

卯四月十一日

大嶋兵庫内

矢嶋仁右衛門

矢嶋甚兵衛

川並

御番所衆中

江戸廻船御荷物之事

七月分
一米貳拾俵

但四斗四升入

拾七貫七百目 拾貳俵

此貫目壹俵ニ付

拾七貫八百目 貳俵

拾八貫目 六俵

一蕨包

御用根津差

貳箇

此貫目壹箇ニ付六貫目ツ

右之通船壹艘積入、今般勢州桑名佐藤孫右衛門方え向致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上

卯五月廿四日

大嶋友之丞印

後藤唯之丞殿

九 交通・商業

三沢良太夫殿

野田對助殿

箕田源藏殿

江戸廻船御荷物之事

七月分
一米貳拾俵

但四斗四升入

拾七貫七百目 拾貳俵

拾七貫八百目 四俵

拾七貫九百目 三俵

拾八貫目 壹俵

此貫目壹俵ニ付

右之通船壹艘積入、今般勢州桑名佐藤孫右衛門方え向致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上

卯五月廿四日

大嶋友之丞印

後藤唯之丞殿

三沢良太夫殿

野田對助殿

箕田源藏殿

江戸廻船御荷物之事

七六五

八月分
一米式拾俵

但四斗四升入

此貫目壹俵ニ付

拾七貫七百目 拾俵

拾七貫八百目 九俵

拾八貫目 壹俵

右之通船壹艘積入、今般勢州桑名佐藤孫右衛門方え向
致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上

卯五月廿四日

大嶋友之丞印

後藤唯之丞殿

三沢良太夫殿

野田對助殿

箕田源藏殿

江戸廻船御荷物之事

八月分
一米式拾俵

但四斗四升入

拾七貫七百目 壹俵

此貫目壹俵ニ付

拾七貫八百目 拾四俵

拾八貫目 五俵

右之通船壹艘積入、今般勢州桑名佐藤孫右衛門方え向

致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上

卯五月廿四日

大嶋友之丞印

後藤唯之丞殿

三沢良太夫殿

野田對助殿

箕田源藏殿

差下申船荷物之事

一米八拾俵

右之通今般勢州桑名迄、川合村源三郎・龜吉・柳藏
船・栃井村庄八船積下申候、川筋御番所無相違御通可
被下候以上

卯五月廿四日

大嶋兵庫内

矢嶋仁右衛門印

矢嶋甚兵衛印

川並

御番所衆中

江戸廻船御荷物之事

九月分
一米式拾俵

但四斗四升入

此貫目壹俵ニ付
拾七貫七百目 三 俵
拾七貫八百目 拾四俵
拾 八 貫目 三 俵

右之通船壹艘積入、今般勢州桑名佐藤孫右衛門方へ向
致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上

卯六月廿七日出船

大嶋友之丞印

後藤唯之丞殿

三沢良太夫殿

野田對助殿

箕田源藏殿

江戸廻船御荷物之事

九月分
一米貳拾俵

但シ四斗四升入

此貫目壹俵ニ付
拾七貫七百目 貳 俵
拾七貫八百目 拾六俵
拾 八 貫目 貳 俵

右之通船壹艘積入、今般勢州桑名佐藤孫右衛門方へ向
致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上

卯六月廿七日出船

九 交通・商業

大嶋友之丞印

後藤唯之丞殿

三沢良太夫殿

野田對助殿

箕田源藏殿

差下申船荷物之事

一米四拾俵

右之通今般勢州桑名迄、川合村源三郎・龜吉船積下申
候、川筋御番所無相違御通可被下候以上

卯六月廿七日

大嶋兵庫内

矢嶋仁右衛門印

矢嶋甚兵衛印

御番所衆中

江戸廻船御荷物之事

十月分
一米貳拾俵

但シ四斗四升入

此貫目壹俵ニ付
拾七貫五百目 拾俵
拾七貫七百目 六俵
拾 八 貫目 四俵

拾 八 貫目 四俵

七六七

右之通船壹艘積入、今般勢州桑名佐藤孫右衛門方へ向致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上

卯九月六日

大嶋友之丞印

後藤唯之丞殿

三沢良太夫殿

野田對助殿

箕田源藏殿

江戸廻船御荷物之事

十月分
一米貳拾俵

但四斗四升入

拾七貫五百目 八俵

此貫目壹俵ニ付

拾七貫七百日 六俵

拾八貫目 六俵

右之通船壹艘積入、今般勢州桑名佐藤孫右衛門方え向

致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上

卯九月六日

大嶋友之丞印

後藤唯之丞殿

三沢良太夫殿

野田對助殿
箕田源藏殿

差下申船荷物之事

一米四拾俵

右之通今般勢州桑名迄、川合村源三郎・龜吉船ニ積下申候、川筋御番所無相違御通可被下候以上

卯九月六日

大嶋兵庫内

矢嶋仁右衛門

矢嶋甚兵衛

川並

御番所衆中

是より御藏米ニて差下申候

江戸廻船御荷物之事

十一月分
一米貳拾俵

但四斗貳升入

拾六貫五百目 八俵

此貫目壹俵ニ付

拾六貫六百目 九俵

拾六貫七百日 三俵

右之通船壹艘積入、今般勢州桑名佐藤孫右衛門方へ向致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上

十一月朔日

大嶋友之丞

後藤唯之丞殿

三沢良太夫殿

野田對助殿

箕田源藏殿

箕田源藏殿

差下申船荷物之事

一米四拾俵

右之通今般勢州桑名迄、川合村源三郎・龜吉船積下申候、川筋御番所無相違御通可被下候以上

卯十一月朔日

大嶋兵庫内

矢嶋仁右衛門

矢嶋甚兵衛

江戸廻船御荷物之事

十一月分
一米式拾俵

但四斗式升入

拾六貫五百目 壹 俵

拾七貫六百目 五 俵

拾六貫七百目 拾三 俵

拾六貫八百目 三 俵

此貫目壹俵ニ付

右之通船壹艘積入、今般勢州桑名佐藤孫右衛門方え向

致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上

十一月朔日

大嶋友之丞

後藤唯之丞殿

三沢良太夫殿

野田對助殿

九 交通・商業

川並

御番所衆中

江戸廻船御荷物之事

十二月分
一米式拾俵

但四斗式升入

此貫目壹俵ニ付拾六貫五百目ツツ

右之通船壹艘積入、今般勢州桑名佐藤孫右衛門方え向

致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上

卯十一月十五日

大嶋友之丞印

後藤唯之丞殿

三沢良太夫殿

野田對助殿

箕田源藏殿

申候、川筋御番所無相違御通可被下候以上

卯十一月十五日

大嶋兵庫内

矢嶋仁右衛門

矢嶋甚兵衛

江戸廻船御荷物之事

十二月分
一米貳拾俵

但四斗貳升入

此貫目壹俵ニ付拾六貫五百目ツツ

川並
御番所衆中

一蕤包 橋本宇左衛門行 壹箇

右之通船壹艘積入、今般勢州桑名佐藤孫右衛門方え向致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上

三五〇 江戸回船荷物目録

○川辺町所蔵
(西村家文書)

卯十一月十五日

大嶋友之丞印

後藤唯之丞殿

三沢良太夫殿

野田對助殿

箕田源藏殿

(解説) 天保七年(一八三六)十一月から、翌年四月ま

での、江戸に送付した荷物目録である。川辺大嶋氏から江戸屋敷あてで、扶持米を中心としたものであり、桑名經由で送っている。

差下申船荷物之事

一米四拾俵

一茶 壹箇

右之通今般勢州桑名迄、川合村源三郎・亀吉船ニ積下

(表紙)

天保七年

御扶持米江戸廻船目錄

申十一月

役所留

江戸廻船御荷物之事

御扶持米百俵之内
一米貳拾五俵

小山村
孫三郎船

拾六貫三百目 貳俵

拾六貫六百目 壹俵

拾六貫七百萬目 壹俵

拾六貫八百目 拾貳俵

此貫目壹俵二付

拾六貫九百萬目 三俵

拾七貫目 貳俵

拾七貫百目 貳俵

拾七貫貳百目 壹俵

御扶持米百俵之内
一米貳拾五俵

小山村
宮七船

拾六貫六百目 四俵

拾六貫七百萬目 三俵

拾六貫九百萬目 六俵

此貫目壹俵二付

拾七貫目 貳俵

拾七貫百目 四俵

拾七貫貳百目 四俵

拾七貫三百目 貳俵

右之通今般勢州桑名大塚松兵衛へ向致廻船候、着岸之
砌御請取可被成候以上

申十一月廿六日出船

大嶋友之丞印

後藤唯之丞殿

三沢良太夫殿

箕田要左衛門殿

差下申船荷物之事

一米五拾俵

右之通今般勢州桑名迄、小山村孫三郎・宮七船へ積下

申候、川筋御番所無相違御通可被下候以上

申十一月廿六日

大嶋甲斐守内

矢嶋甚兵衛印

川並

御番所衆中

第二部 文書の部

七七二

江戸廻船御荷物之事
御扶持米百俵之内
一米式拾俵

川合村
源三郎船

此貫目壹俵二付

拾六貫八百目

拾九俵

拾六貫六百目

壹俵

一蕎包 野田對助殿行矢嶋甚兵衛

里芋壹箇

此貫目拾貫目

御扶持米百俵之内
一米式拾式俵

同村
藤助船

拾六貫五百目

五俵

此貫目壹俵二付

拾六貫六百目

壹俵

拾六貫七百目

壹俵

拾六貫八百目

拾五俵

右之通今般勢州桑名大塚松兵衛方へ向致廻船候、着岸
之砌御請取可被成候以上

申十二月二日出船

大塚友之丞印

後藤唯之丞殿

三沢良太夫殿

箕田要左衛門殿

江戸廻船御荷物之事

御扶持米式百俵之内
一米式拾式俵

川合村
喜四郎船

此貫目壹俵二付

拾六貫五百目

五俵

拾六貫六百目

三俵

拾六貫七百目

七俵

拾六貫八百目

七俵

御扶持米式百俵之内
一米式拾式俵

同村
民右衛門船

拾六貫五百目

壹俵

拾六貫六百目

六俵

拾六貫七百目

七俵

拾六貫八百目

六俵

拾六貫九百目

壹俵

拾七貫目

壹俵

右之通今般勢州桑名大塚松兵衛方へ向致廻船候、着岸
之砌御請取可被下候以上

申十二月二日出船

立木朔右衛門印

後藤唯之丞殿

三沢良太夫殿

箕田要左衛門殿

江戸廻船御荷物之事

御扶持米貳百俵之内
一米貳拾貳俵

小山村
孫三郎船

拾六貫四百目 貳俵

拾六貫五百目 四俵

此貫目壹俵二付

拾六貫六百目 九俵

拾六貫七目 六俵

御扶持米貳百俵之内
一米貳拾貳俵

拾七 貫目 壹俵
同
宮七船

拾六 貫目 壹俵

拾六貫五百目 四俵

拾六貫六百目 三俵

此貫目壹俵二付

拾六貫七百目 壹俵

拾六貫八百目 六俵

拾七 貫目 六俵

右之通今般勢州桑名大塚松兵衛方へ向致廻船候、着岸
之砌御請取可被下候以上

申十二月二日出船

立木朔右衛門印

後藤唯之丞殿

九 交通・商業

三沢良太夫殿

箕田要左衛門殿

差下申船荷物之事

一米八拾六俵

一蕨包 壹箇

右之通今般勢州桑名迄、川合村源三郎・藤助・喜四郎・民右衛門船三積下申候、川筋御番所無相違御通可被下候以上

十二月二日

大嶋甲斐守内

矢嶋甚兵衛印

川並
御番所衆中

差下申船荷物之事

一米四拾四俵

右之通今般勢州桑名迄、小山村孫三郎・宮七船三積下申候、川筋御番所無相違御通可被下候以上

十二月二日

大嶋甲斐守内

矢嶋甚兵衛印

川並
御番所衆中

差下申船荷物之事

此目錄之儀は関下分

にて直ニ関地ニ遣候

ニ付留置不申候

一米四拾四俵

右之通今般勢州桑名迄、小山村廣藏・勝五郎船ニ積下

申候、川筋御番所無相違御通可被下候以上

十二月四日

大嶋甲斐守内

矢嶋甚兵衛印

川並

御番所衆中

江戸廻船御荷物之事

御扶持米貳百俵之内
一米貳拾八俵

川合村

民右衛門船

拾六貫五百目 壹俵

拾六貫六百目 壹俵

拾六貫七百目 四俵

拾六貫八百目 九俵

拾六貫九百目 三俵

拾七貫目 六俵

拾七貫百目 壹俵

拾七貫貳百目 三俵

此貫目壹俵ニ付

右之通今般勢州桑名大塚松兵衛方へ向致廻船候、着岸
之砌御請取可被下候以上

酉三月廿四日出船

立木朔右衛門印

後藤只之丞殿
(唯)

三沢良太夫殿

野田對助殿

箕田要左衛門殿

差下申船荷物之事

一米貳拾八俵

右之通今般勢州桑名迄、河合村民右衛門船ニ積下申候、

川筋御番所無相違御通可被下候以上

三月廿四日

大嶋甲斐守内

矢嶋甚兵衛印

出役ニ付甚九郎代印

川並

御番所衆中

江戸廻船御荷物之事

一米貳拾四俵

川合村

民右衛門船

此貫目壹俵ニ付
拾六貫六百目 貳俵
拾六貫八百目 六俵
拾六貫九百目 三俵

此訳御膳米拾五俵 三拾五俵之内

米四俵 関地下し米貳百俵之内
米五俵 野田對助殿分

一搗麦 三俵 野田對助殿分 同村 同人船

此貫目一俵ニ付拾六貫三百目宛

一米貳拾八俵 同村 源三郎船

拾六貫四百目 三俵
拾六貫五百目 壹俵
拾六貫六百目 貳俵
拾六貫七百目 七俵
此貫目壹俵ニ付

拾六貫九百目 貳俵
拾 七 貫目 壹俵

此訳米八俵 川邊下し米百俵之内

米貳拾俵 古市郡司殿分

右之通今般勢州桑名大塚松兵衛方へ向致廻船候、着岸
之砌御請取可被成候以上

酉四月十一日出船

大嶋友之丞印

後藤唯之丞殿
三沢良太夫殿
野田對助殿
箕田要左衛門殿

差下申船荷物之事

一米五拾貳俵

一搗麦三俵

右之通今般勢州桑名迄、河合村源三郎・民右衛門船ニ
積下申候、川筋御番所無相違御通可被下候以上

酉四月十一日

大嶋甲斐守内

矢嶋甚兵衛印

川並
御番所衆中

三五 江戸回船荷物目録

○川辺町所蔵
(西村家文書)

(解説) 天保九年(一八三八)の江戸に送付した荷物目録である。川辺大嶋氏から江戸屋敷あてで、米・鮎・松茸などを中心としたものであり、桑名経由で送っている。

(表紙)

天保九年

江戸廻船御荷物帳

戌十月廿一日出船

当番

西村才右衛門控帳

江戸廻船御荷物之事

一 御用糯米拾貳俵

但四斗貳升入

拾七貫七百目 拾俵

此貫目壹俵ニ付

拾七貫五百目 壹俵

拾六貫五百目 壹俵

一 御膳米三拾五俵

但四斗貳升入

拾五貫八百目 貳俵

拾五貫九百目 貳俵

拾六貫目 貳俵

拾六貫百目 三俵

此貫目壹俵ニ付

拾六貫貳百目 貳俵

拾六貫三百目 八俵

拾六貫四百目 三俵

拾六貫五百目 四俵

拾六貫六百目 四俵

拾六貫八百目 四俵

拾七貫貳百目 壹俵

壹箇

一 蕨包

此沢州原御札壹対

水天宮御守

関表御日待御備

御用犬山枺葉貳袋

御用栗貳升

御用栢壹升

御用塩鮎拾斗

御用江豚壹包 寄荷貳品

此貫目壹俵ニ付四貫五百目

一 蕨包

壹箇

御用根津差壹箇

此貫目八貫貳百目

一 蕨包 壹箇

御用根津差壹箇

此貫目七貫八百目

一 蕨包 壹箇

此訳御用根松式拾五本

御用とこ路壹包

御用讓葉

御用やふこうじ

小豆五升 後藤唯之丞殿分

大角豆四升壹合五勺 助川善兵衛殿分

此貫目六貫百目

一 蕨包 壹箇

御用塩松茸三百五拾本入壹桶

御用塩鴉拾羽

田村小路様献上塩松茸百本入壹桶大嶋友之丞

此貫目六貫百目

一 蕨包 壹箇

御用鳳尾草式品

献上大豆五升大嶋友之丞

献上小豆五升同人

此貫目六貫六百目

一 蕨包 壹箇

根津差壹箇

小嶋和兵衛殿行 大嶋友之丞

此貫目五貫七百目

一 御家中糯米六俵

此訳壹俵 後藤唯之丞殿分

貳俵 三沢良太夫殿分

壹俵 箕田要左衛門殿分

壹俵 助川善兵衛殿分

壹俵 古市郡司殿分

此貫目壹俵二付 拾七貫五百目 貳俵

拾七貫三百目四俵

右之通今般勢州桑名大塚松兵衛方え向致廻船候、着岸

之砌御請取可被成候以上

戌十月廿一日出船

大嶋友之丞印

三沢良太夫殿

箕田要左衛門殿

差下申船荷物之事

一米 五拾三俵

一松茸 貳箇

一根津差 五箇

右之通今般勢州桑名迄、小山村孫三郎・宮七船ニ積下申候、川筋御番所無相違御通可被下候以上

戌十月廿一日

大嶋甲斐守内

矢嶋甚兵衛印

川並

御番所衆中

三五二 江戸廻船荷物目録

○川辺町所蔵
(西村家文書)

(解説) 嘉永四年(一八五二)の江戸に送付した荷物目録である。川辺大嶋氏から江戸屋敷あてで、米・鮎・穀物などを中心としたものであり、桑名経由で送っている。

(表紙)

嘉永四亥年十一月初り

江戸廻船御荷物帳

年々相用候控書也

江戸廻船御荷物之事

一 御用糯米拾六俵

但し四斗式升入

拾六貫九百目 四俵

此貫目壹俵ニ付

拾六貫八百目 拾俵

拾六貫七目 貳俵

一 御膳米三拾五俵

但し四斗式升入

拾六貫九百目 拾俵

此貫目壹俵ニ付

拾七貫目 拾八俵

拾六貫八百目 七俵

一 蕨包

壹箇

此訊水天宮御守

御用犬山枡葉貳袋

御用枯松

御用ところ

御用やふこうじ

御用讓葉一品

御用鳳尾草一品

御用栗式升

御用栢壺升

此貫目四貫三百目

一 蕨包 壺箇

御用根津差壺箇

此貫目五貫八百目

一 蕨包 壺箇

御用根津差壺箇

此貫目五貫五百目

一 蕨包 壺箇

此訳御用塩鶉十羽

御用塩松茸三百五拾本入壺桶

田村小路様献上

塩松茸百本入壺桶 大嶋友之丞

宮田幸三郎殿行

塩松茸百本入壺桶 大嶋友之丞

箕田要左衛門殿

三 沢 良 輔殿

九 交通・商業

助川善兵衛殿

後 藤 彦 八殿

此貫目五貫九百目

一 蕨包 壺箇

此訳御用塩鶉十羽

御用江豚壺包

献上大豆五升

献上小豆五升

此貫目六貫貳百目

一 蕨包 壺箇

此訳大角五升

小豆五升

蕨包壺ッ

後藤彦八殿行

其外御家中寄荷

此貫目六貫四百目

一 蕨包 壺箇

根津差壺箇

此貫目四貫九百目

一 蕨包 壺箇

大嶋友之丞
右 同 人

助川善兵衛殿御分

後藤彦八殿御分

吉田丹右衛門

後藤彦八殿御分

七七九

御納戸御用根津差沓箇

沓俵 野田猪之助殿御分

此貫目四百目

一 蕙包 沓箇

廣瀬小文太殿行 小嶋覺八郎

此貫目三貫四百目

一 蕙包 沓箇

廣瀬小文太殿行 小嶋覺八郎

此貫目貳貫五百目

一 蕙包 沓箇

廣瀬小文太殿行 大嶋友之丞

此貫目九貫四百目

一 蕙包 沓箇

廣瀬小文太殿行 大嶋元之進

此貫目八貫五百目

一 御家中糯米六俵

此 沓俵 箕田要左衛門殿御分

此貫目沓俵三付 沓俵 三沢良輔殿御分

拾六貫八百目宛 沓俵 助川善兵衛殿御分

沓俵 後藤彦八殿御分

沓俵 古市友太郎殿御分

右之通今般勢州桑名龜屋七兵衛方え向致廻船候、着岸之砌御請取可被成候以上

西十月廿九日出船

大嶋友之丞印

箕田要左衛門殿

三 沢 良 輔殿

助川善兵衛殿

箕田源之丞殿

後 藤 彦 八殿

差下申船荷物之事

一米五拾七俵

一 松茸四 箇

一 根津差七箇

右之通今般勢州桑名迄、川合村源助・栄次郎・文藏船

二積下申候、川筋御番所無相違御通可被下候以上

西十月廿九日

大嶋甲斐守内

矢嶋甚九郎印

川並 御番所

江戸廻船御荷物之事

一 御用糯米拾六俵

但四斗式升入

拾六貫九百目 三俵

此貫目壹俵ニ付

拾六貫八百目 九俵

拾六貫七百日 四俵

一 御膳米三拾五俵

但四斗式升入

拾七貫目 七俵

拾六貫九百目 六俵

拾六貫八百目 拾五俵

拾六貫七百日 七俵

此貫目壹俵ニ付

一 蕨包

壹箇

此訳水天宮御守

御用犬山枡葉式袋

御用根松

御用ところ

御用やふこうし

御用讓葉壹品

御用鳳尾草壹品

御用栗式升

御用栢壹升

此貫目貳貫九百目

一 蕨包

壹箇

御用根津差壹箇

此貫目五貫三百目

一 蕨包

壹箇

御用根津差壹箇

此貫目七貫貳百目

一 蕨包

壹箇

御用江豚壹包

大嶋友之丞

田村小嶋様献上塩松茸百本入壹桶

宮田幸三郎殿行

蕨包壹ツ

右同人

大嶋八三郎殿行

此貫目五貫七百日

一 蕨包

壹箇

御用塩松茸三百五拾本入壹桶

御用塩鮎拾(尾)ヲ

御用塩鵜拾羽

塩松茸百本入壹桶

大嶋友之丞

箕田要左衛門殿

第二部 文書の部

七八二

三 沢 良 輔殿

後 藤 彦 八殿

羽 淵 重 兵 衛殿

此貫目五貫七百日

一 蕨包 壺箇

小豆五升

大角豆五升

蕨包壺ッ

後藤彦八殿行

其外御家中寄荷

此貫目六貫五百目

一 蕨包 壺箇

御納戸御用根津差壺箇

此貫目六貫三百目

一 蕨包 壺箇

根津差壺箇

此貫目五貫五百目

一 蕨包 壺箇

大嶋八三郎行

此貫目七貫貳百目

一 御家中糯米七俵

此貫目壺俵ニ付 壺俵 箕田要左衛門殿御分

拾六貫八百目 壺俵 三沢良輔殿御分

ッ 壺俵 後藤彦八殿御分

壺俵 羽淵重兵衛殿御分

壺俵 助川善司殿御分

壺俵 古市友太郎殿御分

壺俵 野田猪之助殿御分

右之通今般勢州桑名龜屋七兵衛方え向致廻船候、着岸
之砌御請取可被成候以上

嘉永三戌年十一月朔日出船

大嶋友之丞印

箕田要左衛門殿

三 沢 良 輔殿

箕田源之丞殿

後 藤 彦 八殿

羽 淵 重 兵 衛殿

差下申船荷物之事

一米五拾八俵

一 松茸四箇

一 蕈包五箇

右之通今般勢州桑名迄、川合村源助・文藏・栄次郎船
二 積下申候、川筋御番所無相違御通可被下候以上

戌十一月朔日

大嶋甲斐守内

矢嶋甚九郎⑨

川並

御番所

嘉永三戌年十二月十九日出船

大嶋友之丞⑨

箕田要左衛門殿

後藤彦八殿

羽渕重兵衛殿

大嶋八三郎殿

差下申船荷物之事

一 用炭四拾俵

一 蕎麦壹箇

右之通今般勢州桑名迄、小山村治郎吉船二積下申候、
川筋御番所無相違御通可被成候以上

戌十二月十九日

大嶋甲斐守内

矢嶋甚九郎⑨

川並

御番所

一 蕎麦

壹俵

三澤安太郎殿行

此貫目十五貫目

三五三 流水拾得届

○町内石神

石神区所蔵

右之通今般勢州桑名亀屋七兵衛方え向致廻船候、着岸
之砌御請取可被成候以上

九 交通・商業

七八三

(解説) 年号は不詳であるが、飛驒川出水にともなう流木届である。下川辺・石神・上川辺三村が相当量の木材を拾ったが、持主が明確でなかった。その後、尾張藩の役人より引き渡すよう要請があったため、笠松役所に届けたものである。所有権をめぐつての意志表示がうかがわれる。

乍恐以書付御届ケ奉申上候

当正月七日飛驒川通り出水ニ付、流木拾ヒ揚ケ候木数左ニ奉申上候

ノ五拾貳本

下川辺村

ノ貳拾壹本

石神村

ノ貳拾本

上川辺村

前書之木数村々小前之もの共、一命相懸ケ拾ヒ揚ケ村役人え相届ケ参候間、直様先般御触之御印鑑と見競候处、御印相違罷在所、追々尾州御役人方廻村有之、右木数相渡呉候様被申候得共、御届ケ奉申上候上と差延置候間、乍恐右之段書付を以御届ケ奉申上候以上

卯正月

加茂郡下川辺村

百姓代
小

三郎印

一米六俵

相下申船荷物之事

但四斗貳升入

笠松
御役所

三五四

船荷物送り状

○町内中川辺

矢嶋弓男氏所蔵

上川辺村兼石神村

百姓代

年寄	庄	与次右衛門
三郎印	龜屋	印
年寄	庄	又三郎印
佐	貞	助印
平	平	印

(解説) 年号不詳であるが、川辺村問屋が犬山へ荷物を発送したときのものである。運送に船便を利用したもので、尾張藩太田番所へ届けている。

右は犬山、櫻林七郎左衛門方え積下申候、御改之上無
相違御通シ被成可被下候以上

未十二月十六日

川邊村荷問屋

八左衛門印

太田

御番所

三五五 船荷物送り状

○町内中川辺

矢嶋弓男氏所蔵

(解説) 年号不詳であるが、川辺村問屋が船便で荷物を

発送したときのものである。荷物の明細から江戸へ送った
ものと思われるが、各川筋の番所あてとなっている。

積下申船之事

一壹艘

茶十八箇

板井船方

与十郎

右之通積下申候、御改被遊御番所無相違、御通被遊可
被下候以上

巳ノ八月十一日

九 交通・商業

川並
御番所衆中様

川邊船荷問屋
八左衛門

三五六 年貢米破船による願書

○町内福島

福島区所蔵

(解説) 年号不詳であるが、年貢米の運搬中破船による

願書である。役所からは金納に改め収めるよう指示があつ
たが、この米は十分乾燥したので、このままで収めたいと
願ったものである。

乍恐奉願上候御事

一 今般御皆済米積廻シ米之内、西脇村光徳寺下ニて破
船仕候、依之其節直ニ御達申上候通、御米俵より早
速取出シ風入候処、御見分御願申上候得ハ、金納ニ
て御直段両ニ七斗七升替、被成下置候等ニ被仰渡候、
然共此間米多ク相掛り候得ハ、村方百姓中一向及難
儀候、何卒右之破船米廣井、御蔵入ニ被仰付被下置

七八五

候様、重々奉御願上候通被仰付被下置候ハハ、有難
可奉存候以上

巳十二月

福嶋村庄屋 與平次 印
同村組頭惣代 瀬兵衛 印
同村頭百姓代 彦兵衛 印
同村 同断 清左衛門 印

錦織

地方御役所様

II 助郷

三五七 太田宿助郷約定書

○川辺町所蔵
(西村家文書)

(解説) 文化一二年(一八一五)の、太田宿と助郷村々との間で協定した約定書である。近年中仙道の交通量が増大し、助郷人馬の使用も著しくなった。そのため、太田宿と助郷村々との間に利害が相反し、紛争の原因ともなったので、双方にて種々協議して取り決めを行った。すなわち、太田宿の人馬の扱い、助郷村々の人馬使用の方法、これにともなう賃銭支払いの仕方などの記述があつて、かなり詳細にわたった内容となっている。

(表紙)

宿助郷人馬勤方諸事取締申為替之事

定書

一中仙道筋之儀、先年よりは相違仕、近来は二條・大坂御番衆様所々御奉行様方・諸家様方御通行相増、助郷方・宿方共、以前之通り相心得候ては継方不行届、就中不取締候てハ人馬費等有之候ニ付、今般宿役人並助郷村役人立会熟談之上、以来人馬勤方取締取斗方相定候所、左之通り

一 御定式宿人馬・歩行役之者ハ名前・年附、馬役之もの持主名前・馬毛色等毎年二月廿五日迄、前年助郷触当人馬平均兼宿役人・助郷惣代立会、右人馬壹人壹疋毎ニ相改、右人馬名前・毛色書会所え張置、右写いたし助郷えも四枚ツツ請取置可申事

一 右宿人馬之儀、助郷立会之者途中より罷出、不時ニ右人馬可相改候間、右宿人足え名前・年附、馬役之もの持主名前・毛色附之木札ニ、焼印附ニて為持置候様いたし、尤途中ニて助郷より不時改候儀も、人馬役之者え得と申聞置候事

一 宿人馬之儀ハ、助郷寄人馬有之候共、五拾荷・五拾駄之儀ハ、少も無用捨遣ひ可申候事、万一宿人馬御間ニ合不申候節ハ、宿方より雇人馬を以、右荷駄数

急度可継立之事

一 宿人馬之儀ハ、助郷寄人馬より先遣ひニいたし、尤御泊り割入之節も右同様、乍去御朱印御証文等ニて、無賃之人馬有之節は、宿人馬ニて割入可申事

一 人馬駄賃錢之儀、日々御払辻を以、宿役人助郷惣代立会ニて、請取候分取調、当日勤人馬割渡可申事

一 宿人馬を賃人馬え先遣ひニいたし、其後無賃人馬入用有之節、助郷人馬を以継立候共、右賃錢其日平均割ニ可仕候事

一 問屋日ノ庭収之儀ハ、助郷立会之者写取り得と為読合、宿方役人印形為替置可申事

一 助郷人馬触当之儀ハ、宿役人助郷立会ひ之者相談之上、得と取調随分省略いたし、人馬押込割ニ不致、人足ハ人足、馬ハ馬と引分ヶ割合、何村ハ登り何村ハ下りと刻切触当可申事

一 川支等ニて御通行様方、御延引ニ相成候趣ニも有之節ハ、前後先々宿々聞合可申事、就中助郷人馬触有之候とも、御延引ニ相成候節ハ、留触早速差出し、猶また寄置候とも不留置、早々村々差戻し可申候
一 太田宿御陣屋御用持出し人馬並御通行様之節、御馳

走御掛御役人様方、惣て太田村掛り人馬ハ宿人馬ニ
て継立候儀は一切不被致候事

一 宿人馬之内万一病氣之節ハ、壹人壹疋位ハ二三日之
用捨被致被遣候事、尤夫より延々引続類族有之候欤、
又ハ式人式疋ツツも相成候節ハ、宿方より雇立可被
申候事

一 助郷村々におゐて人馬触状到来次第、人馬数無相違
刻限不違早々差出し、若又人馬之内病人馬有之節ハ、
其村々より宿役人中へ相談之上、右村方より雇立可
申事、尤雇賃錢之儀ハ宿方ニて雇立候節ハ、多分之
賃錢不受取候様、宿役人中より御世話有之候様致度
事

一 助郷惣代之儀ハ、代り日之前夜ニ罷出候宿役人え相
届ケ、勤番当日未明より会所へ急度相詰可申事

一 高百石ニ付人足三人、馬壹疋迄ハ村方支配人不差出、
会所立会之者へ差向いたし、人足名前・順番付遣し
可申候、且又其余ハ支配人差出し、尤右小人馬ニて

も、格別大切之御通行之節ハ支配人差出可申事

右之通宿助郷立会、熟談納得之上取究候得ハ、以来右
ヶ条之通少も無異変執斗可申候、依之今般相改為取替

書付双方連印仍如件

文化十二亥二月廿五日

中仙道太田宿問屋

福田次郎平

同 利兵衛

磯貝八九郎

助郷惣代上古井村

利兵衛

下川邊村

官兵衛

栃井村

幾左衛門

中之番村

基兵衛

山之上村

長右衛門

羽生村

淺右衛門

瀧田村

宇兵次

木野村

重右衛門

加茂野村

藏

勝山村

小兵衛

右

外ニ川手伝之儀ハ役外之儀候得共、宿方より相頼も有
之哉ニ付、助郷より手伝取持罷在候処、助郷方近々困
窮ニ付、以来ハ右手伝差上ニ可致候事

三五八 人馬繼立帳

○川辺町所蔵
(西村家文書)

(解説) 天保九年(一八三八)の、巡見使通行のさいの
賃錢支払い明細である。中川辺村から兼山村までのもので
あるが、巡見使一行は相当の人数であったことが、動員さ
れた人馬より推定できる。なお、公務のため支払賃錢は低
賃金であつた。

(表紙)

天保九年

御巡見様御用

御繼立帳

戊閏四月八日

覚

一 御朱印

人足八人

一 御朱印

伝馬拾五疋

一 錢三百九拾文

賃人足拾六人
臨時人足貳人

但從中川邊村兼山村迄壹里八丁程

九 交通・商業

壹人ニ付貳拾壹文宛

而替錢六貫八百文

右之通御朱印人馬差出、並賃人足錢御定之通慥請取申
候、尤御非分成儀毛頭無御座候以上

戊閏四月八日

大嶋甲斐守知行所

濃州加茂郡中川邊村

庄屋

太兵衛印

土屋一左衛門様

覚

一 御朱印

人足八人

一 御朱印

伝馬拾五疋

一 錢三百七拾貳文

賃人足拾五人
臨時人足貳人

但壹人ニ付貳拾壹文ツツ

道法中川邊村より兼山村迄壹里八丁程

錢六貫八百文

右之通

御朱印人足差出、並賃人足錢御定之通慥ニ奉請取候、
尤御非分成儀毛頭無御座候以上

閏四月八日

七八九

濃州加茂郡中川邊村

庄屋
太兵衛印

設樂甚十郎様

人足拾貳人ニ代り

一錢貳百貳拾九文 賃人足拾壹人

但壹人ニ付貳拾壹文ツツ

金壹兩ニ付錢六貫八百文

右之通

御臨時人足帳左ニ

覚

一 錢百七拾文

人足八人

内百三拾三文

宿駕籠三挺

四拾貳文

御手代り貳人

右は中川邊村より兼山村迄、御定之賃錢慥ニ奉請取候、

尤御非分成儀毛頭無御座候以上

戊閏四月八日

濃州加茂郡中川邊村

庄屋
太兵衛印

設樂甚十郎様御内

覚

一臨時人足

四人

但壹人ニ付貳拾壹文宛

此賃錢八拾四文

覚

一 御朱印

人足八人

御朱印

御伝馬拾五疋

内六疋

右之通中川邊村より兼山村迄、定之賃錢慥ニ奉請取候、
尤御非分成儀毛頭無御座候以上

戊閏四月八日

濃州加茂郡中川邊村

濃州加茂郡中川邊村

庄屋
太兵衛印

水野藤治郎様

庄屋
太兵衛印

水野藤治郎様御内

梶川源助様

森安兵衛様

右之通御帳面ニ相記、賃錢不残慥奉請取候

三五九 助郷上納金差出願

○町内西栃井

田原耕作氏所蔵

(解説) 天保一三年(一八四二)の助郷宿寄付金に関する文書である。寄付金は一個人が、近年経費がかさむ助郷宿に対して、充当するようにとの意志からのもので、支配代官所へ願い出る形式となっている。

(表紙)

天保十三年

五街道宿助郷御救差上金証文

柴田善之丞御預り所

美濃国加茂郡栃井村

寅九月

乍恐以書付奉申上候

柴田善之丞御預り所

美濃国加茂郡栃井村

庄屋
嘉吉

一金壹兩貳分也

但御下知次第早速御請上納可仕候

右は私儀

御国恩之余斗先祖之余訳を以ヶ成ニ取続、今日迄相當難有仕合ニ奉存候、就ては其冥加相弁、聊之儀ながら書面之通、上金必願ニ御座候得は、小分之儀ニ付上金なとと申唱候も恐入候、然れとも道中筋之儀は助郷宿方並旅人ニ至迄、一通ならざる難儀之筋ニ付、右御救之廉ニ御差加相成候ハハ、難有仕合ニ奉存候、尤私義

何等平常志願無御座、右上ヶ金被仰付被下候ハハ、冥加至極難有仕合ニ奉存候、依之此段奉内願候以上

天保十三年寅九月

幸田歳兵衛様

右村 嘉吉
年寄 藤助

三六〇 助郷役交替の経緯

○川辺町所蔵
(西村家文書)

(解説) 年号は不詳であるが、助郷役を勤めたいきさつを記載した文書である。往古は助郷村ではなかったが、他村のかわりに役目を命ぜられたとある。以来、太田宿までの距離もあり、経費面でも大変な負担となっていると記述しているが、これは中川辺・栃井両村のことをいっているのである。

覚

一 太田宿伝馬

正徳元年蜂屋村助郷役相勤居申候跡、御柿御用被仰付候ニ付、両役難相勤り江戸御奉行様え御願申上、御免被仰付、右村替りニ助郷役被仰付候、其節御請申上候

右之通被仰付候、御証文御印形

正徳元年卯十一月

御勤定御吟味役

杉岡弥太郎様

萩原源左衛門様

御勤定奉行

大久保大隅守様

大目付

松平石見守様

右御四人道中御兼役

一 高九百八拾五石五斗 中之番村

一 高四百六拾四石五斗 栃井村

右之高ニて御役御請申上候

一 往古ハ伝馬御役場ニてハ無御座候跡、蜂屋村御替り場ニ被仰付迷惑仕候

一 太田宿伝馬人馬並相改奉差上候

一 四百三拾四人 文化七午年惣人馬之並

一 千百五拾人 同末年惣人馬之並

一 七百九拾七人 同申年惣人馬之並

右之通ニ御座候

一人馬数多当り申候節ハ、村方にて人馬都合不在、他村にて買上ニ仕、差出シ難渋迷惑仕候

一 御公儀御巡見様御通行之節、御免定御尋被遊候節は、五ツ内外と御答申上候、其外御尋御座候得は、存不申候と御答申上候

一 中之番村問屋之義ハ、往古より相勤申候と申伝候

一 問屋株之儀御尋被遊候ニ付吟味仕候跡、往古より株も御座候跡、三拾年以前ニ問屋不勝手ニ相成、庄屋方え相願申候ニ付、右庄屋方え引請ニ仕問屋相勤申候

一 太田宿下一場両宿え人馬繼立之儀、中之番村一村ニて両宿え繼立申候、尤御代名方御通之節ハ、御同領栃井村よりも助人馬差出シ申候

一 太田宿より中之番村え式里、中之番村より下一場迄三里半余、右中之番より下一場迄之往来至て山坂斗、難所にて人馬甚難渋迷惑仕候

御尋被為遊候問屋株之儀、書付等吟味仕候得共、無御座候付申伝ニ御座候故奉申上候

三六一 中仙道道中先触

○川辺町所蔵
(西村家文書)

(解説) 年号は不詳であるが、大嶋氏家臣の道中先触である。江戸より中仙道經由で旅行するので、宿々では人馬の準備をするよう依頼したものである。

(封書)

先触

西丸御小姓組番頭
大嶋甲斐守内
箕田要左衛門

覚

後藤唯之丞

一 駕籠人足

三人

一 軽尻馬

壺 疋

右は来ル廿七日江戸屋舗出立、甲州路・中仙道旅行、濃州加茂郡川邊村陣屋迄罷登候、書面之人馬宿々無遅滞御差出可給候、頼入存候以上

辰九月廿四日

西丸御小姓組番頭
大嶋甲斐守内

箕田要左衛門^印

四ッ谷内藤新宿より

甲州路下諏訪

夫より中仙道御嶽宿迄

宿々問屋
役人中

猶以此先触御嶽宿より、川邊村陣屋え御届可給、頼入
存候以上

泊附左之通

廿七日	一八王子泊	廿八日	一大月泊	廿九日	一勝沼泊
十月朔日	一合ヶ原泊	二日	一下諏訪泊	三日	一宮ノ越泊
四日	一美殿泊	五日	一大久手泊	六日	一御嶽泊

右之通致止宿候以上

三六二 東海道道中先触

○川辺町所蔵
(西村家文書)

(解説) 年号は不詳であるが、遠藤氏家臣が領地乙原陣屋に向う道中先触である。江戸より東海道經由で旅行するので、宿々では人馬の準備をするよう依頼したもので、当地区では下川辺が関係している。

(封書)

先触

遠藤求馬内
大村品右衛門

東海道
品川宿より金山宿迄

覚

一宿駕籠 耆挺

此人足式人

一両掛 耆荷

此人足耆人

右は求馬家来高田正兵衛義、明五日江戸屋敷出立、濃州郡上郡乙原陣屋迄罷越候ニ付、東海道品川宿より金山宿迄、書面之人足宿々無遅滞御差出可給候、尤右之趣道中御懸り本多加賀守様え、昨三日御問合相済申候、此一紙差御遣御宿々順達、金山宿より乙原陣屋迄御届可給候、右御頼申候以上

丑六月四日

遠藤求馬内

大村品右衛門 印

東海道

品川宿より金山宿迄

宿々問屋中

泊附左之通

五日

戸塚

六日

小田原

七日

三島

八日

由比

九日

藤枝

十日

袋井

十一日

新居

十二日

藤川

十三日

名古屋

十四日

下川邊

Ⅲ 往来手形

三六三

身延山参詣通行寺手形

○町内西枋井

小川政義氏所蔵

(解説)

寛保三年(一七四三)の身延山参詣通行手形であり、妙雲寺(中川辺)が発行した一種の身分証明書である。

(表紙)

寛保三癸亥正月廿日

身延山参詣

濃州加茂郡川邊村

小川儀左衛門

一札

一 濃州加茂郡川邊村儀左衛門と申仁、宗旨は代々法華宗にて、当寺旦那紛無御座候、勿論御法度之切死丹宗門ニても無御座候、此度身延山え参詣仕候、御関所無相違御通し可被下候、仍て一札如件

寛保三癸亥正月廿日

濃州川邊村法華宗

妙雲寺印

所々

御関所

濃州川邊村

当知是処

大円山妙雲寺

日宣（花押）

三六四 関所女通行手形

○町内中川辺

矢嶋弓男氏所蔵

（解説） 寛延三年（一七五〇）の女通行手形である。関所手形に特徴の一つとして髪風を記入したもので、後家風の髪型と思われる。今切関所とは、静岡県新居町にあった関所で、特に女人の往来を取り調べたところである。

（封書）

女証文

大嶋雲八

髪切女壹人、從美濃国加茂郡川邊村、江戸私屋敷迄引越申候、今切御関所無相違罷通候様ニ、御手判可被下候、右は私家来三沢新左衛門と申者之母ニて御座候、此女ニ付以来、出入御座候は私可申披候、為後日証文仍如件

寛延三庚午年九月晦日

大嶋雲八御判

安藤対馬守殿

三六五 舟通行手形交付経緯

○町内石神

石神区所蔵

（解説） 文化二年（一八〇五）の舟手形に関する文書である。舟手形交付のいきさつを述べたもので、太田番所からの問い合わせに答えたものである。

乍恐以書付を奉申上候

一此度私シ舟手形之義ニ付、御尋御座候所、当村市右衛門と申者ハ、拾年以前ニ薪商売仕候、其後源藏と申者庄屋仕、從其拙者庄屋請取、宝曆四戌年舟手形御願申上候所、早速御聞濟御通被下、難有仕合ニ奉存候、此度御尋之趣奉申上候以上

文化二年丑十月

石神村庄屋

藤助

太田御番所様

芝与市右衛門支配所、加茂郡石神村庄屋徳十郎・源太郎手形を以、薪其外村方出生桐竹、並雜穀川並御番所御通し被下候処、今般庄屋引替り、貞助・久七兩人ニて相勤候得共、右兩人之内ニて手形印形を以是迄之通、御通し可被下候、則印鑑奉差上候以上

文政十亥年正月

石神村庄屋

同 久七
貞助

太田御番所様

三六六 庄屋交替舟手形承認願

○町内石神

石神区所蔵

(解説) 文政一〇年(一八二七)の舟通行に関する文書

である。庄屋が交替したが、従来通り舟荷物の通行を願ったもので、使用中の手形・印鑑とともに提出している。

乍恐以書付御届ケ奉申上候

IV 商業

三六七 飛驒街道筋旅館開設一札

○町内下川辺

木下喜作氏所蔵

(解説) 明和六年(一七六九)の文書である。飛驒街道筋で旅館業を開設したいが、それについては村内にも、一切迷惑を掛けないといった内容である。

差出申一札之事

一私共儀飛驒^(街)海道往還端ニ居申候ニ付、御用飛脚、下呂入湯之往来、或ハ奥筋より伊勢参宮、諸商人一夜泊り之宿借し申度候間、先達て御届申候、若如何様之儀出来仕候共、御役人中ハ不及申、村中ヘ毛頭御世話、御苦勞かけ申間敷候、勿論一夜限りニて逗留、一切為致申間舗ト右之通被仰付候ヘは、私共勝

手ニ相成候間被仰付可被下置、依之書付印形指出候以上

明和六年丑四月

下川邊村願主

岡次郎^印

与吉^印

庄屋

喜六殿

年寄

善藏殿

三六八 酒樽送り状

○町内中川辺

矢嶋弓男氏所蔵

(解説) 天明四年(一七八四)の酒送り状である。かなりの数量が、遠州(静岡)方面と取り引きされていたことが推定できる。

積送申酒之事

〆一印五拾樽

右之通此度積送申候、着岸之砌御改御請取可被下候、

尤樽焼印虫喰穴、貫目附札相改遣候、被入御念御改御
請取可被下候、送状仍て如件

天明四年辰九月十八日

遠州高塚ニて

小野田五郎兵衛殿

濃州川邊

矢嶋八左衛門⑧

三六九 酒類販売取扱請書

○町内下川辺

木下喜作氏所蔵

(解説) 天明六年(一七八六)の酒類販売に関する文書である。近年凶作のため、販売者の酒取り売りを中止するよう村内で申し合わせたが、他村への販売まで中止しては、販売者の生計が成り立たなくなる。それに村内での販売中止といつても、必要の場合もあつて、居酒屋方式だけを中止すればよいではないか、といった内容である。役所へ願書を提出し、請書形式となっている。

差上申御吟味御請書之事

一 当村半三郎儀願出候は、是迄連々酒取売仕候処、当年凶作ニ付村方へ売候義、相止メ候様村方一統申候ニ付、其段庄屋より被申渡、商売被差障候ては、迷惑仕候得共、無扱村方売之義堅ク不仕候、然処他所他村え売候義も、相止候様被申渡候ニ付、半三郎義至て持高も無数、殊ニ家内大勢之者相続難仕候故、取売商売仕、其余力を以漸御年貢諸役等相勤、家内相続仕候処、右之通他所商まで被差留候ては、必至と及潰御百姓相続難仕迷惑仕候間、何卒商売相成候様奉願、尤他所商仕候ても、村方之費と相成候義ハ、有之間敷筋と奉存候間、御吟味之上商売仕度奉願候ニ付、村役人並掛合、茂平・権右衛門等被召出、差障之趣迄御吟味御尋ニ付、茂平・権右衛門申上候は、当年世柄悪敷候処、村方ニ酒売有之候得は、自然と酒給候様ニ相成、失墜相立候事ニ付為相止度、尤先年も酒売候もの有之処、居村・他村共為相止候義も有之処、其例を以為相止候方、可然存双方村方同様之趣ニ、其段庄屋へ申述候義ニ、御座候段申上候ニ付、猶又被仰聞候ハ、先年酒売候節差留候由ニ候得共、其節ハ差留候ても、渡世之差支ニも不相成故、御役

所えも不願出候て事済候得は、半三郎義ハ少高之百姓家内人数多、相高作方斗ニては相続難成ニ付、右商売仕来り、其余力を以御年貢諸相勤、漸相続いたし、殊更商売取はだて候ニ付、親方手前より繰遣しも出来仕候処、此節中途ニハ無謂被差留候てハ、必至と潰ニおよび候段申立候趣、曆然之難義ニ候、尤世柄悪敷キ節は、酒ニよらずいつれ之品ニても、不相調様ニ費を看ひハ、銘々之心得勝手次第ニて事済候義ニて、商売いたし候ものを指留候義は有間敷、殊更最初、茂平・権右衛門等より庄屋へ申入候節、村一統申候様ニも相聞候ニ付、無抛庄屋より其段、半三郎え申聞候得とも、他所迄も商ひ相止候てハ、半三郎曆然難儀ニ候間、庄屋了簡として、茂平・権右衛門へ申候は、他所商之義ハ其尽ニいたし候方、可然其段村方より申立候族へ、申聞候様ニと申渡候処、其後半三郎五人頭六右衛門へ茂平申聞候は、半三郎酒売候義ニ付、村方大勢庄屋方へ相赴候様子ニ相見候段、跡形も無之義申威シ、且権右衛門義神主方日待之節、居合由候者共へ申聞候は、他所商之儀も所々承合候処、皆々不承知候、いつれハ如何被致

候哉と、外ニ一同聞合候義も無之儀取拵居合候、四五人之者へ申聞候ニ付、其席ニ居合候者共も、外ニ一同ニ候ハハ、其通りと相答させ、其尽庄屋へ相赴、他所商之義皆々不承知ニ候段申達ニ付、不得止事其段庄屋より、半三郎え申聞させ候趣無相違、乍然若実々障之筋も有之哉、一同申合候義も有之哉と、五人組之者共不殘御召出、御尋被成候処一向申合候義も無御座、尤他所商仕候ても、何ニても相障候義、無之候段申上、猶又組下之者共、内糺仕候様被仰渡候ニ付、銘々組内相尋候処、申合候義一向無之、然処村方一同之様ニ、右躰聊之義ニ御法度筋、徒党ニも似寄候義を、申触候者有之候てハ奉恐入候間、御吟味被成下度旨、五人組連印を以申立候上ハ、全ク茂平・権右衛門外一両輩之存寄ニて、半三郎商売為相止度発担いたし候得共、彼等斗之申立ニてハ不行届義ニ付、村方一同之様ニ庄屋を申掠メ、勿論酒売不売義ハ、敢て御構も不被成候得共、聊之義ニても庄屋方へ、大勢相赴候などと申、宮え寄合など、又ハ他所商之儀も、皆々不承知ニ候などと、大勢をかたらひ我意を募り候趣ニてハ、御法度筋ニも相振レ

不埒之段、殊更此度ニ不限、是迄追々村方評義寄合等之節も、重立村役人等も差置、右兩人存寄を申募り候ニ付、重立候者共腹心不致、自然と寄合之節も出取不致様ニ成行、弥以彼等が我意之評義ニ落行、村方人氣も往々不宜、旁以茂平・権右衛門義は、以来五人組頭御取放シ、尤此末寄合評義之席ハ勿論、平日共ニ御用之外、庄屋方え不相赴様可仕段被仰渡、且又庄屋義並年寄り等、御役所御用向並、都て郡中取斗等年来実躰相勤候ニ不似合、右兩人へ対し候てハ、心弱キ取斗故畢竟、其所を見込我意を申募り候間、以来都て評義之節、右兩人不相受、平日共其心得可有之候、然上ハ已来村評義寄合候節ハ、高持重立長百姓自身罷出可出かけ、名代不差出熟談いたし、何事も任旧例ニ、尤新規費之筋ハ無之様、末々迄順ニ取斗可申事ニ候

半三郎取商仕候義、少高ニて家内大勢相統難仕候趣、殊更中途ニて商相止候義ハ及潰ニ、難義曆然ニて候間、是迄之通商売可致、乍然村方之ものとも居酒之義ハ、自然と費ニも相成候義も可之有候間、居酒之儀ハ相止可申候、御陣屋元之義、他所郡中之者も立

入候義ニて、無抛酒入用之義も間々有之義ニ候得ハ、村方売決て差留候てハ、却て不弁用ニ候間、樽酒・徳利酒等之義調ニ参候外ハ、相互之弁用ニ候間勝手次第可致候

右御吟味被仰渡候趣承知奉畏候、且又茂平・権右衛門彼是我意申立不埒ニ付、御咎メも可被仰付候得共、格前之御宥免を以其段ハ御免被成下候間、以来心底相改万端相慎、何事ニても村方一同評義相決候義は聊不相背、村方ニ隨順可仕旨急度被仰渡畏候、依之一同連印差上申処如件

天明六年午十一月

下川邊村百姓

茂平

権右衛門

次左衛門

半三郎

百姓代又右衛門

年寄武助

庄屋喜右衛門

御役所

右御吟味被仰渡之趣、私共一同罷出承知可仕旨、被仰渡遂一承知仕、以来被仰渡之趣ヲ以、組内之者ともえも申聞候様可仕候、依之奥印奉差上候以上

五人組頭

次郎作
織部
善藏
小三郎
源兵衛
平八
与次右衛門
弥右衛門
金左衛門
六左衛門
半右衛門
清四郎
甚三郎
惣助
浅右衛門
藤左衛門

五人組頭
長次郎
〃
〃
〃
金十郎
〃
〃
五人組頭代
佐五郎
長作
甚右衛門

御役所

三七〇 酒類販売規制協定

○町内中川辺

矢嶋弓男氏所蔵

(解説)

年号は不詳であるが酒造関係の文書である。酒造に対し一〇分の一の課税が実施されることとなったが、それでは営業が成り立たない。そのため販売について規制するよう、近郷六か村で取り決めたことの記述である。

定

御公儀様より被仰酒造米拾分壺、去戌年より上納仕候
上は、御造家難致立行、仍之売方之儀無契、来ル五月
朔日より相改則

覚

一 酒小売方五合より下売不申候事

一 樽詰並竹筒等相改都て切枴ニ致候事

一 居酒之儀不致候事

右之趣御承知之上酒御求可被下候、尤左之通酒造家申
合相定申候事如件

亥四月

関郷 右行司
上有知 右行司
下有知 右行司
太田 右行司
加治田 右行司
中川辺 右行司